

『受胎告知』 井上隆晶牧師
イザヤ書7章10～14節、ルカによる福音書1章26～38節

①【伝統的なマリア論とは】

ナザレという町のおとめマリアのもとに天使ガブリエルがやってきてこういいました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」（ルカ1：28）この挨拶を聞いたマリアは戸惑い考え込みます。するとガブリエルは「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。」（31節）といいます。その時のマリアはまだ15歳くらいだったといっています。マリアはヨセフと婚約していましたが、まだ結婚していませんでしたので「どうしてそのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」というと、ガブリエルは「聖霊（神の霊）があなたに降り、いと高き方（神）の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」（1：35）と説明します。

人間は救いを必要としており、一方神は、人と共に生き死ぬための肉体を必要としていました。幼いマリアがそのための身体を提供したのです。彼女の中で神と人が初めて一体になり、イエス様が生まれました。この「処女降誕」について、マリアは普通の子を産み、その子の上に神の霊が後から宿ってキリストとなったという異端になります。マリアは単なる人間を生んだのではありません。マリアの胎内に宿ったのは神です。マリアの胎内では神と人が一体になり、そのキリストを産んだというのが教会の信仰です。そこで431年のエフェソ公会議ではマリアに「神の母」（テオトコス）という称号をつけ、451年のカルケドン公会議ではキリストの降誕についてこうまとめました。「神性によれば万世の前に聖なる父より生まれ、人間性によれば、我らのために、また我らの救いのために、世の終わりに、神の母（テオトコス）である処女マリヤより生まれたもう。」

その後、カトリック教会は「マリアには原罪がない（無原罪）」、「マリアは永遠の処女である」、「マリアは肉体と魂が共に昇天した（被昇天）」、「祈りの仲介者である」、「教会の母である」といった教えを加えてゆきました。正教会もマリアの無原罪は認めませんが、その他の教えをそのまま信じています。私たちプロテスタントではそのような教えを聞いたことがありませんので、なかなかぴんと来ません。マリアは礼拝される者ではなく、尊敬される者である、ということだけは分かります。

②【お言葉どおりになりますように】

ガブリエルのお告げに対してマリアはすぐに「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」（38節）といってその身を献げました。献身です。マリアが神の言葉を受け入れた時、彼女の中に神の子キリストが生まれま

した。マリアの上に起こったことはすべての人の上で起こることなのです。私たちが神の言葉を信じて受け入れるとき、聖霊の働きによって私たちの中に霊的にキリストが生まれるのです。しかし献身というのは楽ではありません。神のみ心は時として厳しいものだからです。投げ出されたいこと、従いたくないことも言われるからです。だからこのマリアの言葉は十字架の匂いがします。実際マリアはこの後、救い主の母になるという過酷な運命を負わされることとなります。ナザレでは私生児といわれ、白い目で見られましたし、次から次へと理解できないことが起こってきます。そして最後は最愛の息子の十字架刑です。心が剣で裂かれるような思いをすることになります。私のマリアに対するイメージは、美しく清い聖母というものではなく、忍耐強い沈黙の母のイメージなのです。誰にも言えない悲しみや苦しみを抱えて、それらを「心に納め、思い巡らしながら」ひたすら従い続けた人だと思ふのです。

●渡辺和子シスターが「若い時に考えていた勇氣は、新しいことにチャレンジし、何かを成し遂げる勇氣でした。しかし歳をとってくると、受け入れがたいものを受け入れてゆく勇氣というものが必要であることを教えられています。」と述べていますが、献身とはそのようなことなのです。

③【人は苦しむことによってキリストがその内に出来上がる】

『ルターはマリアを崇敬していたか?』という題名の本を読みました。ルターは生涯にわたってマリアを尊敬していたようです。そしてキリスト教生活の模範としていました。こんなことを書いています。

●「マリアは信仰、謙遜、慎みという三つの徳のバラで飾られている。」「聖なる処女は大いなる謙遜から、徒歩で遠い道のりを年老いたエリサベトのところまでゆく。」「マリアがナザレにいたとき、彼女は独りの貧しい若い女であり。誰からも注目されず、…彼女がいただいた大いなる奇跡を誰も感じようとしない。彼女はまたそれについて沈黙しており、自らも町中でとるに足らぬ者と考えている。…彼女がいかに途中の宿屋で軽蔑されたかを考えてみよ。」

詩編 90 編は「祈り、神の人モーセの詩」という副題がつけられ、よく葬儀で用いられます。それは 3 節に「あなたは人を塵に返し、人の子よ、帰れと仰せになります。」(3 節)とあるからです。モーセはイスラエルの民をエジプトから救い出し、約束の土地まで導くという大事業をしました。それなのに彼は怒りをもって岩を打ったので、約束の地に入れませんでした。そこで彼はネボ山に静かに登って消えてゆきます。「人の子よ、帰れ」と神が言われれば、仕事が途中でであろうと人は去らなければならないのです。イエス様の母となったマリアはどうでしょう。ある日、突然メシアの母となるという運命が自分の人生の中に入ってきました。そして彼女の生涯は苦しみの連続でした。ザカリアとエリサベトの夫婦はどうでしょうか。子どもを願ったのに若い時には与えられず、高齢になって子育てをする

体力を失ってから与えられます。救いに関わる仕事をさせられる人、神の仕事を
負わされた人はすべてそうです。神が舞台の主人公であって、人間はすべて脇役
なのです。しかしそのように神に仕えた人たちの人生はどれも神の栄光で溢れて
います。

●心の病の勉強会に、パーソナリティー障害と DV の夫をもつご婦人が来ていま
す。地獄のような生活でしたが夫さんはやがて亡くなります。彼女は「病気の勉
強をして、今まで夫がすべて悪いと思っていたけど、自分も悪かったことが分か
った。今では夫を赦している。しかし子どもたちは夫の DV を見て育ち、夫を赦し
ていない。これからの私の人生は、人を赦すことを子どもたちに教えてゆくとい
う宿題が残っている。」と言われました。また、先日引きこもりの当事者からお話
を聞く集会がありました。30代の青年は、幼い時両親が離婚し、母親に引き取ら
れます。母が再婚するのですが、その相手が DV で姉に暴力を振るうので、それ
をかばうためにいつも自分が悪者になったといえます。でもあまりに DV が激し
いので交番に駆け込み、児童養護施設に入ります。そんな人の温もりや愛を知ら
なかった彼が教会に行くようになり、受け入れられ、愛され変わってゆきます。
この二人の共通点は、大変な苦しみを体験した人は豊かさを持つということです。
苦しみがそれだけで終わらず、その顔に優しさと逞しさが表れているのです。ま
るで「修道士」のような、いい顔をしているのです。

神に負わされた十字架を黙って負い、どんなに理不尽でも正しく生きよう、人を
愛そう、人を赦そうとして生きる姿を見る時に、まるでキリストを見ているよう
な感じがするのです。苦しみの神秘です。マリアは胎内にキリストを宿しました
が、出産してからもその体内にはキリストはおられないのではなく、信仰と従順
によって内なるキリストがどんどん大きくなっていったのではないかと思います。
私たちも主の御心を求めて、それに従い続ける生き方をしたいと思います。